

第3分科会 通常の学級における取組

テーマ 「一人一人の教育的ニーズに応じた指導の工夫」

提案2 「一人一人が輝く学級づくり」

～学級経営と学習指導において～

発表者	愛媛県 今治市立常盤小学校	教諭	阿部 玲子
司会者	愛媛大学教育学部附属特別支援学校	教諭	竹内 昭雄
助言者	香川県教育委員会 特別支援教育課	主任指導主事	稲田 典子

I 実践に当たって

I 学級の実態

今年度担任している学級（6年29名）は、明るく素直な児童が多く、仲良く学習活動を行っている。しかし、児童によって積極性や学習の理解度に大きく差がある。そのため、自分に自信がもてず、「自分のことは好きではない」「自分は人の役に立っていない」と感じる児童もいる。

そこで、児童一人一人が学級に存在する意義を感じ、楽しく学習に取り組むことができれば、自分に自信をもつことができると考え、「一人一人が輝く学級づくり」について取り組んだ。

II 実践内容

I 一人一人が輝くための学級経営

(1) 居心地の良い学級にするために

① 温かい言葉のシャワー

児童に褒め言葉を言うと、いつも笑顔が返ってくる。温かい言葉を掛けることが、児童にとって居心地の良い場所を作ることにつながると考え、4月から意識して褒め言葉などの温かい言葉を伝えるようにした。

1学期の終わりに、「先生から掛けられてうれしかった言葉」についてアンケートを行った。一部、回答を紹介する。

(調査日 令和3年7月16日)

○ できていることを褒められた。(5人)

「完璧」… 自信が付いた。

「すごい！えらい！」… 当たり前なことでも褒められたらうれしくなってやる気が出た。

「やりましたね」… できていることに対して褒められることが少なかったからうれしかった。

○ 苦手なことができるようになって褒められた。(4人)

「上手やん」… 必死に頑張ったことを褒められてうれしくなった。

○ 良いことをした時感謝された。(5人)

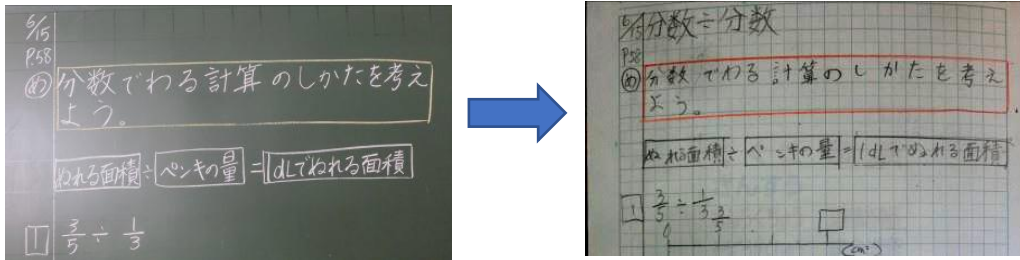
「ありがとう」… 良いことをした時言われるとうれしかった。

に、残り時間が見て分かるタイマーを使用した。

時間に間に合いにくかった児童だけでなく、ふだんから時間通りに動いていた児童も、「タイマーが分かりやすく見通しがもちやすい」という感想をもっていた。

② ノートに合わせた板書の工夫

児童が使っている5ミリ方眼ノートのますの数に合わせて、板書をした。板書で行が変わっているところと、ノートで行を変えるところが一致しているので、児童は板書を写す際にスムーズに書けると考えた。



〈ノートに合わせた板書の工夫〉

(2) ミニ先生

練習問題などに取り組む際、問題が終わる時間に差ができてしまう。また、机間支援に十分な時間が取れず、指導が行き届かないこともある。そこで、課題を十分に理解しており問題を早く終わらせた児童は、「ミニ先生」として支援に回るようにした。

すると、ふだん教師には「教えてください」と言いにくい児童も、ミニ先生には「教えて」と言いやすいようだった。また、ミニ先生をした児童も、教えているうちに自分の間違いに気付くなど、友達に教えることが自身の振り返りにつながっているようだった。

(3) 少人数グループ

一回の授業で、一度も挙手をせず、自分の考えを發表しないで終わる児童も少なくない。そこで、自分の考えを發表する経験を増やし、少しでも自信をもつことができるようにするために、少人数グループでの活動を取り入れた。發表することが少ない児童も、少人数グループでは必ず自分の考えを言うことができた。「学級全体の前で發表するのは緊張していたけれど、少人数グループの發表で慣れたので、全体でも發表できるようになった」という児童もいた。友達のを考えを聞くことで、自分の考えが広がったり深まったりしたという児童も多かった。また、ふだん話す機会が少ない友達と話せる良い機会だと捉えている児童もいて、学習だけでなく人間関係づくりにも役立ったと感じた。



〈活動の様子〉

Ⅲ 成果と今後の課題

1 成果

- 担任が積極的に温かい言葉を用いることで、児童も友達に対して温かい言葉掛けができるようになってきた。児童にとって、担任は重要な学習環境であり、与える影響が大きいことを実感した。
- 交換ノートのやり取りは、児童の実態把握のためにも、とても有効であると感じた。やり取りの頻度は児童によって差はあるものの、それぞれに担任とのやり取りを楽しんでいた。今後も、児童一人一人のペースに合わせて交換ノートを進めていき、児童の小さな変化を見逃さないようにしたい。
- 視覚的に意識できるようにしたタイマーや板書の工夫については、児童から「分かりやすかった」「これからも続けてほしい」という声がたくさん上がった。これからも、児童の必要感を逃さず捉え、それに合わせて準備をしたい。

2 課題

- 係活動や話し合い活動により、一人一人が活躍できる場を確保でき、やりがいを感じている児童も多かったが、それでもそのことがまだ自己肯定感を高めることにつながっていない児童がいる。様々な場面で自信をもたせたり、「あなたが必要だよ」ということを感じさせたりしていかなければならない。
- 少人数グループでの活動を積み重ねることで、自分の考えを発表することに慣れてきた児童もいる。しかし、学級全体での発表の場では、やはり特定の児童が活躍している。少人数グループでの活動の流れを学級全体の場につなげて、発表が少ない児童の発表の場を増やしていきたい。

〈指導・助言〉

本実践では、児童にとって居場所のある学級とするため、担任が温かい言葉のシャワーで一人一人の良さを伝えるとともに、交換ノートで児童との信頼関係を深めている。また、「クラスをより良くする」という意識付けを行い、集団への所属感を育む係活動や話し合い活動を進めるとともに、学習指導では時間を視覚化し、見通しをもたせるなど分かりやすい環境づくりを行うことで、児童にとって居心地の良い学級になったと思われる。課題として、学級での活動による自己肯定感の高まりに、個人差が見られたようだが、自己肯定感の育成については、学級だけでなく家庭等での関わりも重要である。学級での取組や児童の変容を学級通信等で発信し、家族からも褒められる場を作ったり、校内での異学年交流を通して、リーダーシップを発揮する機会を充実させたりすることも有効である。

児童の主体性を生かす学習指導の組立については、特別支援教育の視点を取り入れ、実態把握チェックシート等を用いて、児童の障がいの状態に応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的に行うことで、通常の学級において「分かる」「できる」授業を工夫することが大切である。その際、保護者の了解の下、特別支援教育コーディネーターや関係する教科担当者と連携して個別の指導計画等を作成し、それに沿った指導を行っていく。個に応じた支援は、学級担任や教科担任による配慮、特別支援教育支援員による支援、特別支援学級の弾力的運用等で工夫していくことが考えられる。また、個別の指導計画の作成により、教育活動全般における児童に対する指導や支援を振り返り、関係する教員等で評価を行えるため、適切な指導や支援の設定につなげることができる。